

英語および英語学習に対する信念の構造と自己効力感との関係

○島田英昭 (信州大学)
田中江扶 # (信州大学)

鈴木俊太郎 # (信州大学)

キーワード: 動機づけ, 期待, 価値

問題と目的

グローバル化の中で英語教育のニーズが高まっている。英語の上達のためには授業や研究の時間だけでなく、継続的な自習が重要である。

この中で本研究は、継続的な自習を促すために、動機づけの期待理論に基づき、英語または英語学習に対するどのような種の信念が継続的な自習を促すのか、検討する。

方 法

手続き・参加者

インターネット調査により、大学生 519 名 (18-23 歳, 平均 20.7 歳, 男性 253 名, 女性 266 名) を対象に、以下の質問項目への回答を求めた。

材料

英語学習の自己効力感尺度 島田他 (2016) のデータを参考にして、継続的な英語の自習ができるかどうかの自信を評価する 6 項目を作成した (例: 英語の勉強時間は長い方だ)。

英語・英語学習に対する信念尺度 動機づけの期待理論に基づき、BALLI 等の先行研究および島田他 (2016) のデータを参考にして尺度を作成した。下位尺度として努力期待 (例: 英語の勉強をしつかりすれば、語が実用的に使えるようになる)、能力期待 (例: 英語をいくら勉強しても、才能がなければ上手にならない)、動機づけ期待 (例: 英語はその気になればすぐに習得できるものだ)、価値期待 (例: 英語は日常のさまざまな場面で役立つ) についてそれぞれ 6 項目、合計 24 項目を作成した。

結 果

因子構造の特定

因子分析により因子構造を特定した (最尤法, バリマックス回転, 因子負荷量 .40 以上を基準)。英語学習の自己効力感尺度については、1 因子構造を確認した。クロンバックの α 係数は .811 で十分な内の一貫性が認められた。

英語・英語学習に対する信念尺度については固有値 1 以上の 4 因子が抽出されたが、解釈可能性からその中の 3 因子を分析対象とした。第 1 因子は努力期待と動機づけ期待の合計 11 項目が含まれ、「努力期待」と命名した。第 2, 3 因子は当初の想定通り能力期待および価値期待が 6 項目ずつ含まれた。 α 係数は順に .895, .794, .855 であり、十分な内の一貫性が認められた。以下、この因子構造で尺度得点を算出し、分析を進めた。

表 1 重回帰分析の結果

独立変数	β	p
努力期待	.110	=.057
能力期待	-.196	<.001
価値期待	.027	=.641

自己効力感に与える影響

英語学習の自己効力感尺度を従属変数、英語・英語学習に対する信念尺度の下位尺度を独立変数とした重回帰分析を行った結果を表 1 に示す。標準化偏回帰係数 (β) をみると、能力期待が最も影響が強く、有意であった。次に、努力期待が強く、有意傾向であった。価値期待の効果はそれほどみられなかった。決定係数は $R^2=.057$ ($p<.001$) であった。

考 察

能力期待の有意な負の効果を示されたことから、継続的な英語の自習を促すためには、能力期待の信念を修正することが効果的であることが示唆された。また、努力期待についても有意傾向が示されており、努力期待の信念を高めることも、継続的な英語の自習を促すことにつながると考えられる。一方、しばしば社会における英語の重要性が強調されるが、価値期待に働きかける信念修正は、英語学習にそれほど影響がないと考えられる。

ただし、決定係数が $R^2=.057$ と小さかった。この点については、本研究が自己効力感を学習の指標にしていることの妥当性、および英語学習に影響するその他の変数を考慮する必要性があると考えられる。

引用文献

島田英昭・鈴木俊太郎・田中江扶 (2016). 自律的英語学習者が持つ信念と動機づけ 日本教育心理学会第 58 回総会発表論文集, 262.

注

本研究は JSPS 科研費 JP15K02675 の助成を受けたものです。